

開拓の記憶を後世に

根室管内・中標津町 NPO法人伝成館まちづくり協議会

周辺の町並みは変わったものの 90 年の長きにわたって旧北海道立根釧農業試験場庁舎(設立当時の名称は北海道農事試験場根室支場)は北側にある白樺並木と共に、存在そのものが人をひきつけてきた。

旧庁舎は、1927 年(昭和 2 年)に根釧原野を開発するための試験研究強化機関として建設された。当時としては、珍しい鉄筋コンクリート造一部 3 階建てで総床面積 1400 平方メートル。

この旧庁舎を初代場長の松野伝氏にちなんで「伝成館」と名付けて、地域開拓の歴史資料を収集し、次世代へ伝える場として保存し活用することを目的に設立されたのが、「NPO 法人伝成館まちづくり協議会」だ。

旧庁舎の意義について代表理事を務める飯島実さんは「関東大震災後の、レンガ造りから鉄筋コンクリートに移り変わる時代の記念すべき建物です。北海道遺産になっている格子状防風林の中央にある、第二期の北海道開拓の最前線の司令部のような存在。開拓のシンボルであると同時に市街地がここから形作られた、いわば町の原点であり、この建物の歴史はこの町の歴史そのもの」と語る。

現在は、周辺に木々が立っていたり、改装や増築により、創建当時とは印象が異なるが、かつては下から見上げるとまるで丘の上にポツンと建っているような印象を

受けることから「丘の洋館」とも呼ばれていたという。また、「わずか数十戸の集落の丘の上に、一部 3 階建ての鉄筋コンクリートの国の施設が設置され、暗い夜の原野の中、その建物に煌々と灯りがついている姿は、『これだけの立派な建物があるのだから町はこれから発展するだろう』と移住者に勇気や安心感をもたらしたようです」(飯島さん)



かつて「丘の洋館」と呼ばれていたころの伝成館

■ 保存運動を開始

2003 年(平成 15 年)3 月、完成した新庁舎に移転したことで旧庁舎はその役目を終え取り壊されることが決定していたが、それを知った地元の有志が「まちの記憶を残したい」と立ち上がり、旧庁舎本館保存推進会を発足。保存活用の受け皿と

してNPO法人にすべく街頭での署名や募金活動などの保存運動を展開した。北海道の公式ホームページへメールによる投書をするなど、道へも訴えたが、保存の方針はなかなか決まらなかった。それからほどなくして同年8月、新庁舎で飯島さんら同協議会のメンバーが、就任して間もない高橋はるみ知事との面会を果たした。



現在の伝成館。北側にある白樺並木と共に景観スポットになっている

財政負担などから当初は消極的だった町も、同協議会が解体費用の確約をしたところ方針が変わり、道に無償譲渡を要望。その後、同協議会は同年11月にNPO法人として認証された。そして遂に、2004年7月、異例ともいえる道から中標津町へ無償譲渡がなされ、NPO法人に管理委託することが実現した。なお、伝成館は2009年（平成21年）には関連施設とともに国の登録有形文化財に認定されている。

高橋知事に面談した当時について飯島さんはこう語る。

「あくまで交渉はせず、なごやかに面談しました。関係者が全員そろっている場で知事に『しょうがないわね』と言われたことで、やっと事が進み始めたのです。あの時、知事に『保存できない』と言われたら、き

っと伝成館はなかったでしょう」。

■ 運営は試行錯誤の連続

飯島さんは、1949年（昭和24年）の東京都生まれで国土交通省の航空管制通信官として全国の空港などに勤務。3年間、中標津空港の出張所長を務め、地域住民と交流を深めていた。その後、和歌山県の南紀白浜空港や広島空港に勤務していたが、組織改革を機に53歳で退官。2003年、三女が千葉の大規模な中学校になじめずに苦しんでいたことや、中標津町を去ったあとも北海道遺産の運動を通じて町民との交流が続いていたことなどから、妻の辰代さんと三女を連れて町内の計根別に移住し、NPOの代表に就くことに。現在は30年以上の紙飛行機作りの経験を生かして、道内外のイベントや小学校などでオリジナルな「ふしぎヒコーキ」の作り方を教えている。また、自然や地域の歴史についての新聞コラムなどでの執筆活動も行っている。

空港勤務の現職時代に3年間単身赴任していたとはいえ、移住し、伝成館を運営することは想像以上に苦難の連続で、冬の厳しさはもちろん、広い建物の維持管理や、館の運営方法を巡り、失敗したり苦悩したりの連続だったという。

活動が始まった当初は、テレビや新聞で取り上げられることも多く、多額の寄付が寄せられたり、伝成館を利用して様々な活動をしたいという人々が理事や会員として集まったりし、NPO法人としてスタート。その資金を使い改修工事をして設備も整えた。そして始まったのが町内の整骨院による高齢者介護事業だった。「一見すれば設備が良くなり、マイクロバスや人々の

往来があったことで賑やかな施設になったという印象に見えたでしょう」（飯島さん）。しかし、実際に運営してみると、廊下やトイレなど全館暖房で燃料費の負担が重く、せっかくの寄付金がどんどんなくなっていったという。

また、辰代さんが店長となり「食茶房なみき道」もオープンした。経緯は次の通りだ。移住当初、飯島さんが漠然とレストランでもできたらと考えていた矢先、たまたま郊外の牧場レストランのオーナーから経営をまかせたいというオファーがあった。飯島さん一家にとっては願ってもいないことで、短期間ではあったが貴重な経験を積むことができたという。そうした流れの中で、伝成館内にもレストランの設備を完備し、NPO法人とは別の組織としての有限会社「なみき道」の運営を任せられることになった。

その後、数年が経過し、問題の介護施設は中心市街地に移っていった。

「運営当初は、収益事業を盛んにしようと色々な人が関わって夢物語を語っていましたが、事業が簡単にはいかないことがわかると、それまで関わった人たちや会員が自然に減り、ようやく静かな時間が訪れるようになりました。この建物にいかに負荷を与えずに保存していくか、方向転換する時期がきたのです」と飯島さん。

そこで思いついたのが建物自体を使うのではなく整備した駐車場を有効に利用すること。それが日曜朝市だった。家庭菜園や自家用温室から持ち寄る新鮮な野菜や有精卵などは地域住民に評判となった。

さらには、使われなくなった教員住宅な

どを改装し、短期間のお試し居住体験を通じて移住を促進する「お試し暮らし」という事業の委託を町から受けることになった。館が受け付け窓口となり、飯島さん夫婦が移住のアドバイザーとして時には極寒冷地への移住の厳しさなど率直なアドバイスを交えながら、自らの体験を伝えたことで、道内でもトップクラスの実績を誇った時期もあったという。

■ 記憶を伝える「語り部談義」

現在、活動の大きな柱となっているのは、開拓期を知る地元の高齢者が毎週水曜日に、根釧原野の歴史など様々なテーマについて、この地域での経験談などを語り合い、昔の記憶を記録として残す活動だ。NPOの設立前から長く継続されてきた。

この「語り部談義」は当初は資料や写真を見ながら昔の思い出を語り、映像や音声、紙芝居などで残していたというが、現在は地域に残された開拓時代からの短歌にまつわる様々な話を語ってもらっている。そうすることでより深く短歌で伝えたい開拓期の思いを理解できるという。

こうした事業のほか、伝成館には、地域の雇用の場となっている警備会社や酪農ヘルパーの組合、世界を相手に深夜も活動しているインターネット事業や、地震予測の調査研究をする目的で東京の大学が入居し、それぞれ活動している。NPOの活動費は、こうして入居している団体が運営会員となって運営経費を負担しているほか、そば打ち同好会、地元の建築士会などが使用した時間分の利用料があてられている。

館内にはこのほか音楽を聴いたり、演奏

したりする防音完備のスタジオや地域の
開拓関連書籍を集めた資料室などもある。



昔の記憶を記録として残す「語り部談義」。左は代表
理事の飯島実さん

■ 無理なく自然にいつまでも

現在、旅館経営者や酪農家など12人の
理事がいるが、運営状況は決してラクでは
ないという。「お試し暮らし」事業は20
14年4月からは観光協会が担うことにな
ったが、実務は今まで通り館内で理事の
糸氏セキさんが引き続き行っている。

飯島さんはこういう状況になってよう
やく活動環境が整い始めたと認識してい
るという。古くて不便な建物だが、倉庫や
創作アトリエとしても使え、また4年前か
ら迷い猫のポンタと暮らすことになって、
もし夜間に寒冷地、豪雪地特有の異常な事
態が起きて、即時に対応できるようにな
ったそうだ。

なによりも副代表の栗崎勝秀さん、糸氏
さんら実務に携わる人が日常的に居てく
れることで、NPOの活動や創作活動にも
集中できるようになり、あとはそれらの活
動が両立できて収入が安定さえすれば理
想的な状況になる。また、懸案の暖房費問
題は、部屋ごとの個別暖房化によってある

程度は改善された。最近では、昔懐かしい
薪ストーブが屋久島の民宿から提供され
たこともあり、語り部談義などの集いの場
としての雰囲気さらに高まったのと同
時に、大量の間伐材が提供されたことで暖
房経費が大幅に削減。周辺の環境整備にも
貢献しながら長期的に活動を持続できる
希望が見えてきたという。

これまでの活動について飯島さんは「成
り行きでたまたまここに来て、気づいたら
10年以上が経ちました。でも、ようやく
足場が固まったかなと思います。あとは、
もし若い方が新しい切り口で引き継いで
くれたらこのうえなくうれしいですね」と
語る。

今後も、伝成館が一番輝いていた昭和の
記憶を後世に残す活動に力を注いでいく
考え。

紙飛行機を飛ばすとき、飯島さんから
「高く遠くに飛ばそうと思わず、力を抜い
て、欲張らずに飛ばすこと。そうすれば思
った軌道にそってきれいに飛んでくれる」
とアドバイスを受けた。飯島さんの活動は、
紙飛行機のように、これからも自然な流れ
で進み続けるに違いない。

■ 連絡先

〒086-1153

標津郡中標津町桜ヶ丘1丁目1番地

NPO伝成館

NPO法人伝成館まちづくり協議会

代表理事 飯島 実(いじま みのる)

TEL : 0153-73-4301

Email : denseikan@excite.co.jp